

## 僕は後悔していない

人がたくさんいる中で、僕は列を待って立っていた。すると、スカート姿で、長い髪の毛の女の子が、土手をかけ下りてきて、僕のぶつかりそうになった。

その時、その髪の毛が、太陽の逆光で、まぶしかった。同じくらい歳の、その女の子は僕の目の前で止まった。

そして、水を忙しそうにかいている、その水屋のおじさんに、その女の子は、何か気安く話し、弟を捜している様子で、尋ねる様から、そのおじさんとは、知り合いの様である。

おじさんの隣りのもう一人の手伝っている人から、

「かわい子やな、どこの子や。」とか、

言う声でしたが、聞き取れなかったが、

「だれだれさんの娘さんや、ええ子やろ。」

と、答えていた様だった。

そのまま、その子は、水辺の方へ、走って行った。僕はその後姿を目で追った。

その女の子と彼女が同じ保証はない。

もう一つ、別の、小学校四年の時の、あの女の子も、彼女と同じ保証はない。

しかし、この二人の女の子の記憶がはつきりと僕の頭に戻って来た時、

僕は、目の前のこの女性とは、

初めて会う人とは全く信じられない、強い愛着感、親密感を感じていた。